

INMP 通信 No. 33

December 2020



International Network of
Museums for Peace

編集：安齋育郎、小島健太郎、山根和代

翻訳者：赤松敦子、寺沢京子、山本美穂子

米国テキサス州の「ヒューストン永遠のガンディー博物館」

最も多様性に富み人口の多い米国の都市の一つであるテキサス州ヒューストンで、明確な目的を掲げた最新の平和博物館で心躍るような企画が進行中です。その博物館は「ヒューストン永遠のガンディー博物館 Eternal Gandhi Museum Houston (EGMH)」です。2002年に同市に設立されたマハトマ・ガンディー図書館を発展させたもので、2019年に現在の名称になりました。マハトマ・ガンディー図書館は、ガンディーの誕生日を祝って、毎年恒例の平和行進や「平和のための千の灯」といった文化行事を開催するなど、ヒューストンとその近郊の地域でガンディーの遺産を広める活動を積極的に行ってきました。

また、ヒューストン地域の70以上の組織と協力して、毎年「マハトマ・ガンディー・ウィーク」を開催し、一連の活動を通じて、若者たちがマハトマ・ガンディーの革命的な活動を学び、理解することを目的としてきました。

1869年生まれのガンディーの生誕150周年の記念行事を2018年から2019年の1年間にわたって行い、その一環として

大学・図書館・病院などの公共の場でガンディー展を開催しました。

この博物館の原動力であり、創設以来評議員を務めているのは、ガンディーのアシュラム（活動の拠点）の地であるインドのグジャラート州アーメダバードの郊外のサバルマティという街で育ったアトゥル・コタリ Atul Kothari です。コタリは1974年に高等教育を求めて渡米し、ガンディーに関する著名な教師となりました。



マーティン・ルーサー・キング・ジュニア博士は、「人類が進歩するつもりがあるのならば、ガンディーの思想を避けて通ることはできません。彼は、平和と調和の世界に向かって進化する人類という未来像に発奮して生き、考え、行動したのです。」と述べています。ガンディーは米国の地を踏むことはありませんでしたが、今でも人々を

鼓舞し、模範となり続けています。彼の最も忠実で、実際に社会を変えた信奉者はもちろんキングであり、キング自身もまた、世界中で平和的な社会変革を目指して努力する何百万人もの人々を鼓舞し、励まし続けています。

博物館の企画の基本原則は、ガンディーの生涯と業績を通して、来館者が意識を変えることで世界を変革することを目的とした、活気に満ちた教育機関を創造することです。

この博物館では、ガンディーの生涯と業績を紹介するだけでなく、様々な世界の指導者の生涯と業績にスポットを当て、非暴力の紛争解決をめざす平和的なレジスタンスの力を描写しています。この博物館の目的は、紛争解決の手段として非暴力を選択することの重要性をすべての人々に伝えることです。

2017年に博物館を建設するためにヒューストン南西部に3エーカーの土地を取得しました。敷地の購入代金110万ドルは、理事会が集めた資金で支払われました。2019年には博物館建設のための資金調達キャンペーンが開始され、インドのナレンドラ・モディ首相による銘板の除幕式が事実上の鍍入れ式となりました。建設のために提案された予算（650万ドル）のうち、290万ドルはすでに調達されています。残りの360万ドルを調達するために、財団・企業・民間の寄付者に協力を依頼し、資金調達キャンペーンが続けられています。この博物館は2022年に開館する予定です。

55ページに及ぶ重要な「Milestone Creative Document」は、[こちら](#)の豊富で刺激的なウェブサイトで見ることができます。

また、この博物館は、2005年に開館したインドのニューデリーにある「永遠のガンディー・マルチメディア博物館Eternal Gandhi Multimedia Museum」

の姉妹組織のようなものです。『クリックするだけで学べるガンディー：マルチメディア化されたマハトマ・ガンディーPushbutton Gandhi: The Mahatma Goes Multimedia』と題された、ガンディーに関する世界初のデジタルマルチメディア博物館の鮮やかに描写されているレポートは[こちら](#)からご覧いただけます。インターネット上の5～6分の館内案内を見るには[ここ](#)をクリックしてください。この博物館はガンディー記念館ビルラー邸の1階にあります。ここはガンディーが暗殺された日を含む人生の最後の5ヶ月間に滞在した場所です。彼の質素な部屋は、同じ建物の1階にある国立ガンディー博物館の人気観光スポットです。この博物館は1961年に現在の場所に設立され、1973年に国立記念館となりました。より詳しい情報は[こちらのリンク](#)からご覧ください。



国立ガンディー博物館
(ガンディー晩年の棲み家)の入口

オランダの 「平和と非暴力の博物館」

25年前の1995年、オランダの10の平和団体が集まり、「平和と非暴力のための博物館 Museum for Peace and Nonviolence」のための財団を設立しました。1999年には、「平和と非暴力の博物館」は、巡回展（一部は博物館が制作したものと、他の団体からの借用

品) と、バーチャル博物館へと発展するHPの運営を開始しました。2013年から2018年までは、ゴータにある南ホルントのレジスタンス博物館に常設展示スペースを設けました。

博物館の規約では、恒久的な博物館は、船(これがロゴの由来であり、年2回発行されるニュースレター「De Vredesboot」=「平和の船」)に乗って、国内の多くの場所を巡り、オランダ語圏のベルギー北部にまで航海することを目標としています。平和の船が寄港する場所では、メディアの注目を集めたり、学校からの見学や平和イベントなどの機会を提供することになっています。しかし、この想像力に富んだプロジェクトの実現には、多額の資金と組織的なバックアップが必要で、まだ実現には至っていません。



HP(毎年8万人以上が訪問)には、現在16のオンライン展示があります(今後追加される予定)。テーマは、子どもと平和、平和市長会議、広島・長崎、核兵器の違法性、平和運動の歴史、和解、寛容、平和のための漫画、平和ポスター、平和の庭などです。展示物の一部は貸し出しも行っていますが、多くの場合、非常に充実しているだけでなく、最も有益な情報を提供していますが、「International Museums」と呼ばれるものを除いてはオランダ語で書かれています。「International Museums」では、世界中のいくつかの博物館のオンライン展示を主に紹介して

います。現在紹介している9つのエントリーの中には、南アフリカのヨハネスブルグのアパルトヘイト博物館、ニューヨークのパソス(バーチャル)平和博物館、イギリスのブラッドフォード平和博物館、広島平和記念資料館、ネルソン・マンデラ、ベルタ・フォン・ズットナーなどがあります。

2002年から今日までに全国で開催された200以上の巡回展のテーマ、開催日、開催場所などの詳細なリストは[こちら](#)からご覧ください。巡回展の設置・撤収、運搬、オープニングイベントの企画などの作業は、博物館のスタッフ(無給)がボランティアの小さなチームの助けを借りて行っています。同様に印象的で大変便利なのは、「閲覧室 Reading Room」セクションの内容で、何百もの出版物(書籍、報告書、文書、雑誌)がリストアップされており、その全てがpdfファイルとして提供され、閲覧することが可能です。これらの出版物の多くは英語で書かれています。[こちら](#)を参照してください。また、[こちら](#)と[こちら](#)も参照してください。

チベット博物館での 非暴力抵抗の60年写真展



インドのダラムシャーラーにあるチベット博物館Tibet Museumは開館20周年を迎えます。この博物館の常設展『長きにわたって故郷を望む A long look

homeward』は、チベットの近年の歴史、中国による占領、チベット人の亡命経験についての展示です。中国によるチベット侵攻（1949年）から10年後の1959年にダライ・ラマは国を離れ、その後約8万人のチベット人がダライ・ラマ14世の後を追ってインドに亡命しました。

また、この博物館は特別展や巡回展も開催しています。約 40,000 枚の写真の収集は、このテーマに関する世界最大のものであります。短い（3～4 分）プロモーションビデオを[こちらで](#)見ることができます。



常設展を見る来館者

1989年にダライ・ラマ14世がノーベル平和賞を授与されてから30周年と、中国による抑圧的なチベット占領とそれに対する1959年の蜂起から60年になることを記念して、『非暴力抵抗の60年 60 Years of Nonviolent Resistance』と題する60枚の写真展を2019年12月10日から17日まで開催しました。この写真展の開会式には、亡命中のチベット議会のペマ・ユングニー Pema Jungney 議長が参加しました。同時に、展示された60枚の写真すべて収録した書籍も出版されました。この特別展は、積極的非暴力教育センター：Active Nonviolence Education Center (ANEC) が主催し、チベットの解放闘争の実践者がどのように様々な非暴力の道具を使ってきたかを示し、平和の文化を促進し、非暴力・創造性・連帯を強化し、予想を超える相乗

効果を生み出してきた出来事を可視化することを目的としています。詳細は[こちらのウェブサイト](#)をご覧ください。また、[こちら](#)にもより多くの情報がありますのでご覧ください。

平和のための文化博物館(メキシコ)とニューヨーク市平和博物館

“メキシコの奥地”と呼ばれる先住民の住む地域に身を置いてみて、彼らの考え方や世界観、宇宙観の素晴らしさを知りました。そのため、彼らの先祖代々の秘密を集めた博物館を作り、それを一般の人たちと共有したいという思いが芽生えてきました。「平和のための文化博物館 Museum of Cultures for Peace」は、メキシコ州に存在するマザワ、オトミ、トラウィカ、マトラツィンカ、ナワトル民族の様々な文化の展示スペースとなるでしょう。また、メキシコのすべての文化圏に敬意、公平性、平等性が適用される場所として、平和の価値観を実践するでしょう。

常設展の日程は、元々のコミュニティの生活サイクルとの幅広い関わりから、農業サイクルに基づいています。つまり、展示はその地域社会のサイクルに応じてローテーションされており、博物館は生き生きとしたダイナミックな状態を維持しています。この博物館は、相互作用と交流に重点を置きます。平和構築のための基本的な要素に寄与すると考えられる重要なテーマを紹介する予定です。メキシコ州の5つの文化が人類の平和に貢献していることを紹介していきます。普遍的な価値としての平和は、歴史の中でさまざまな文化がもたらしてきた複数の貢献によって築かれてきたものです。社会を構成する異なる集団間の緊張と暴力が目立つ現代において、人類全体が恒久的な紛

争に没頭するのではなく、代替手段を持つことができるような戦略を提供することが大切です。平和を促進する一つの方法は、相互尊重と異文化間の対話です。したがって、この博物館は、変わりゆく伝統と文化を持つ異なるグループ間の共存についての対話と振り返りを促進するツールとなることを目指しています。



平和のための文化博物館の模型を持つ筆者

この博物館プロジェクトは、2018年にサン・フェリーペ・デル・プログレソSan Felipe del Progreso (SFP) のアレハンドロ・テノリオ・エスキヴァルAlejandro Tenorio Esquivel町長と、同町にあるメキシコ州異文化大学Universidad Intercultural del Estado de México(UIEM) のアニバル・メヒア・グアダラマAnibal Mejia Guadarrama学長に提示しました。2020年2月に最初の石が敷かれ工事が始まりました。

私はまた、私と私のチームが緊急に必要なだと考えているニューヨーク平和博物館New York City Peace Museumの創設者であり、館長でもあります。それは、インタラクティブで夢中になれるような体験、ワークショップや展覧会、コンテストや会議などを通じて、「平和教育の文化」にアプローチする機会を一般の人々に提供することです。博物館の構想では、各メンバーの視点、専門知識、特質や潜在能力を結集して、独自の個性と個性を持った博物館を実

現しています。ニューヨーク市平和博物館は、活動性、建築、アート、コーチング、ダンス、デザイン、教育、努力、エンパワーメント、信仰、インクルージョン、イニシアチブ、イノベーション、調停、瞑想、音楽、オープンスペース、計画、心理学、責任、持続可能性、チームワーク、ヨガなどを通じた平和をテーマにしています。魂が身体に命を与えるような、物事が起こる知的な空間の創造を考え、メンバー一人ひとりが責任を持って自分の概念的な表現に取り組み、博物館の内容を豊かにし、多くの「平和を通じた」経験を共有することで平和を祝う生きた博物館にしていきたいと考えています。博物館設立の可能性のある場所は、現在3か所に絞られています（ニュースレター第28号2019年9月号1頁参照）。

セルジオ・コペリオヴィッチSergio Kopeliovich(建築家・画家、メキシコシティ)



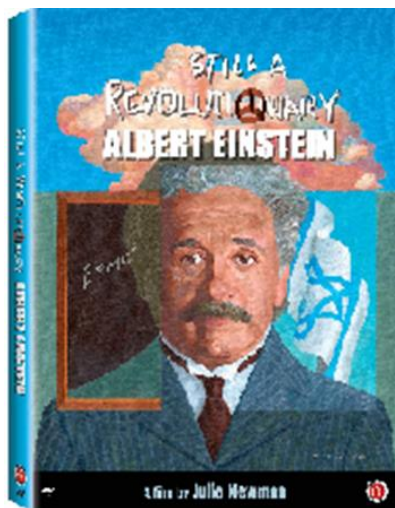
平和のための文化博物館プロジェクトの発表
市長の脇には学長と筆者

平和ミュージアムでアルバート・ アインシュタインと出会う

アルベルト・アインシュタインは20世紀の偉大な理論物理学者であり、戦争に抵抗した重要な人でもあります。彼は、世界政府（世界連邦）を熱心に提唱しました。それは、彼の秘書であったオット・ネイサンOtto Nathanとヘインズ・ノーデンHeinz Nordenによって編集された『アインシュタイン平和

書簡*Einstein on Peace*』(1960年、704頁)に記されています。

彼の社会・政治活動家としての特質は、映像作家のジュリア・ニューマン Julia Newmanによって新しく作られた80分のドキュメンタリーにも表されています。それは『アルベルト・アインシュタイン：今も革新者 Albert Einstein: Still a Revolutionary 』で、[DVD](#)として入手可能です。彼女は、あまり知られていない公文書や書簡、新たに明らかになったインタビューなどをふんだんに活用し、アインシュタインは画期的な理論だけでなく、革新者としての実践も、今日重要であると論じています。刺激的な[2分の予告編](#)は、このサイトで見るができます。



1945年12月10日、今から75年前、アインシュタインはニューヨークのアスター・ホテルで演説を行ないました。そのわずか4カ月前に、米国は広島と長崎に原子爆弾を投下していたのです。9分間の「戦争では勝利したが、平和は得られなかったThe War is Won but the Peace is Not」と題したスピーチの音声は、[ここで聴くことができます](#)。抜粋を読むことは、スピーチを理解するのに役立ちます。スピーチの原稿は、アインシュタインの『晩年に思うOut of my Later Years』(1950)に収

められています。彼は平和と社会正義を希求しましたが、それは特に、ホロコーストで生き残ったユダヤの人々のためでした。

アインシュタインは、アルフレッド・ノーベル(1896年12月10日他界)に共鳴して、戦後の(核のある)世界に警告を発したのです。つまり「勇敢な取り組み、政治概念の包括的姿勢の革新が必要であり、それが出来なければ人類の文明は滅びる」ということです。平和ミュージアムでは、アインシュタインのメッセージを伝え、根本的改革の必要性と、その達成方法を説明しています。

アインシュタイン・ミュージアム Einstein Museumは、ベルン歴史博物館 Bern Historical Museumの中で最も人気のあるコーナーで、歴史博物館の2階すべてを使い、アインシュタインの人生を広範囲にわたって展示しています。博物館内にあるミュージアムだといえます。当初は、彼がベルン在住時に着想・発展させた相対性理論の100周年を祝う企画展(2005-2006)でした。それが、人気と重要性に鑑みて常設展になったのです。詳しくは、[ミュージアムのサイト](#)や、[このサイト](#)をご覧ください。ベルン市中心部の、[彼が住んでいた家](#)が、2階に常設展示されています。



忘れられていたノーベル平和賞受賞者の再評価(スイス・ベルン)

アルベール・ゴバ Albert Gobat (1843-1914) は、スイスの著名な教育

者・歴史家・弁護士・政治家・平和主義者であり、第一次世界大戦前に、二つの重要な国際平和組織の指導的立場にありました。彼は列国議会同盟the Bureau of the Inter-Parliamentary Unionの初代事務局長(1892~1909年)と、ベルンを本拠地とする国際平和ビューロー(IPB)の二代目事務局長(1906-1914年)を務めました。1902年には、同胞であり友人でもあるエリー・デュコマンElie Ducommunと共にノーベル平和賞を受賞し、彼の偉大な功績が認められました。デュコマンは後にIPB局長の役職を引き継ぎました。

1910年には、IPBが同賞を受賞した際に、両者の栄誉が再び称えられました。

2002年には、デュコマンとゴバの受賞100周年を記念して、国際平和運動の意義を固く信じる第一人者である両氏を偲び、称えるための様々な記念行事がスイスで開催されました。

2018年、ベルン州の大評議会(州議会)は、ゴバの仕事を示す展示物を市庁舎内で展示することを決定し、同市にあるスイス連邦議会にもそれに倣うよう促しました。ベルン州は、4人の芸術家にゴバを称える作品のデザインを提出するよう呼びかけ、最優秀作とその他の作品を7月2日から4日まで市庁舎内で展示しました。写真家であり、インスタレーション・アーティストでもあるエステル・ファン・デル・ビー Esther van der Bienによる作品は、2021年に市庁舎の中心部に常設展示される予定です。



アルベール・ゴバ (写真提供: zvg)

詳細(ドイツ語、写真付き)については、[こちら](#)をご覧ください。また[こちら](#)にも情報があります。[こちら](#)には上記の記事よりも前に書かれた記事があります。



アルベール・ゴバを称えるエステル・ファン・デル・ビーの受賞作品 (写真提供: エスター・ファン・デル・ビー)

2020年10月、ゴバの出身地であるバーニーズ・ジュラ地方のトラメランに「平和のためのゴバ財団 Foundation Gobat for Peace (Fondation Gobat pour la Paix)」が設立されました。ゴバ財団の名前には、ゴバの名字だけが使われていますが、これは父親の活動に深く関わっていた娘のマルグリート・ゴバMarguerite Gobat (1870-1937)の意味も含めるため意図的に名付けられたものです。

彼女は、1915年に「国際調和のための世界女性連合 the Universal Union of Women for International Harmony (Union mondiale de la femme pour la concorde internationale)」を共同設立し、1919年には「平和と自由のための女性国際連盟 the Women's International League for Peace and Freedom (WILPF)」のスイス支部を設立しました。2016年にジュネーブにあるIPBの図書館が閉鎖されたことを受けて、財団は新しく、非常に適切な場所であるということで、その場所に本部を移しました。

詳細については、[こちら](#)のリンクをご覧ください。また最近のドイツ語と

フランス語の記事は[こちら](#)と[こちら](#)をご覧ください。



マルグリート・ゴバ
(写真提供：ゴステリ財団)

オスロのノーベル平和センター からの知らせ

ノーベル平和賞は、オスロのノーベル平和センター(NPC)で毎年発表されますが、受賞者を特集する展示が史上初めてオンラインで、世界中の人たちに向けて発信されます。期間は、2020年12月10日～2021年12月1日です。10月9日に発表されたように、今年の受賞者は「世界食糧計画」です。そこで、平和センターは、評価の高いアフリカの写真家のアイダ・ムルネ(Aida Muluneh)氏にフォト・エッセイの作成を依頼しました。翌月にはコートジボワールのアビジャンにある彼女自身のスタジオで写真を撮り作成を始めました。彼女は、食糧や飢餓が戦争・紛争において戦略的兵器として用いられてきたことを伝えようと企画しました。展示のうち10枚の写真は、10か国の紛争を表しています。米国が農作物を燃やし尽くしたベトナム、今も続く内戦で人類最悪の惨事を引き起こしているイエメンなどが含まれています。イエメンでは何百万もの人が飢餓に直面しています。

Aida Muluneh氏はエチオピアで生まれ、イエメンで育ち、カナダに移り、アメリカで仕事をしていました。彼女

のトレードマークは、伝統的なものと現代的なものを組み合わせて、多様なアフリカを表すことです。明るい原色を使い、ボディペイントやカラフルな衣装で女性を表します。

彼女のフォト・エッセイは、センターのサイトやノルウェー放送協会(NRK)のサイトで、まずデジタルバージョンで紹介されます。2020年度ノーベル平和賞の展示は、センターで12月12日から、新型コロナウイルスによる制限が解かれた後に始まる予定です。展示の詳しい情報やAida氏については、[こちらのサイト1](#)および [2](#)でご覧になれます。

2020年夏、センターは「良い知らせを届ける平和の鳩 Peace dove with good news」という新しい企画を始めました。毎週金曜日の正午、5月～9月まで、白い鳩がシティホール広場にあるセンターの窓から放たれます。鳩が広場上空を飛ぶとき、ジョン・レノンの歌「平和を我等にGive Peace a Chance」が鐘楼から流れるのです。また同時に、世界をより平和的な方向へ歩みを進めていると「今週の良い知らせ」を報じています。冬期(10月～4月)は、[平和の鳩](#)はデジタル上で放たれます。



ベトナム「火の雨」 (photo credit: Aida Muluneh for the Nobel Peace Center)

コメニウス博物館と墓所 オランダのナールデン

チェコの偉大な教育改革者であり、（プロテスタントの）ボヘミア兄弟団の指導者であり、愛国者でもあるヤン・アーモス・コメニスキーは、コメニウス（1592～1670年）として知られていますが、350年前の11月15日にアムステルダムで亡くなりました。三十年戦争（1618年～1648年）で宗教的・政治的な迫害を受け、1628年に祖国を離れ、ポーランド・イギリス・スウェーデン・ハンガリーなどで亡命生活を送り、1656年にアムステルダムに定住しました。



博物館の建物の正面

死後はナールデンの近くにある小さな中世の教会に埋葬されましたが、1930年代に建物がチェコスロバキア政府に引き渡され、コメニウスのための墓所に改装されました。1937年には、チェコ国家の聖地の一つとして、墓所とコメニウス博物館が完成しました。コメニウスは教育方法と学習に革命を起こし、多くの革新的なベストセラーとなった本の著者であり、近代教育学の先駆者とみなされ、「教育のコペルニクス」と呼ばれています。彼の教育学の主な原則は、子供を中心とし、学習は（1）活動することによって、（2）言葉ではなく例題（視覚化）を通して学び、（3）外国語（ラテン語）ではなく母国語で学ぶ、というものです。教育の目的は、すべての人の解放であるべきであり、今日では生涯学習の先駆者としても認識されています。

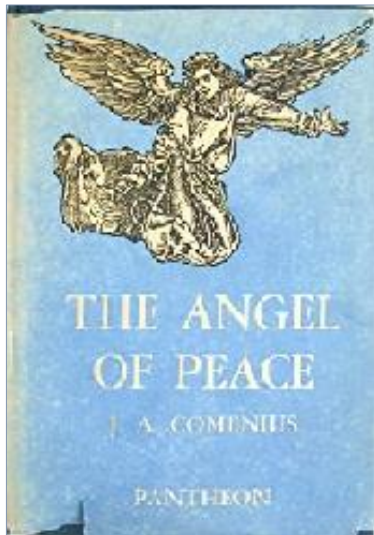
2020年7月3日から2021年5月2日まで、博物館では『コメニウスが進めた教授学の改革 Reform pedagogy on the shoulders of Comenius』と題した特別展を開催しています。コメニウスの教育的な考え方やアプローチは、20世紀初頭にマリア・モンテッソーリやルドルフ・シュタイナーなどを経て復活を遂げました。これらの近代教育の改革者たちは、第一次世界大戦のトラウマを克服し、教育の重要性とその刷新の必要性を認識し、コメニウスに思いを馳せながら、より良く、より平和な世界を求めていました。今日、コメニウスの著書で最もよく知られているのは『世界図絵 Orbis pictus』（1658年）で、17世紀のマルチメディア本ともいえる遊び心ある視覚的な教科書です。平和に関する著作の中には、ブレダの講話会議に向けて書かれた『平和の天使 The Angel of Peace』（1667年）があります。



人類の不断の改善の可能性についてのコメニウスの楽観主義と普遍的なビジョン—“私たちは一つの世界の市民であり、すべての人は平等に人間である”—は、彼をまた、平和の先駆者にしています。墓所には、もう一つのモットーである、“…すべてのものから暴力を排除しよう”という言葉が掲げられています。シンボルでいっぱいの装飾的なガラスパネルのいくつかは、彼の平和活動の努力を描いています。

彼は当時の宗教戦争を非難し、「武装している宗教とはどんな宗教なのか」と言いました。彼の平和の概念は、戦争の廃止にとどまらず、搾取や強制を含む社会のあらゆるレベルから暴力を排除することを目指しています。それは、構造的・文化的な暴力や環境の尊重といった現代的な概念を予感させるものです。

詳細な情報（オランダ語とチェコ語のみ）については[こちら](#)と、特別展については[こちら](#)、または[こちら](#)（英語表記）をご覧ください。44枚の写真のギャラリーは[こちら](#)からどうぞ。



『平和の天使』の英語・ラテン語版、ニューヨーク発行（1944年）

平和のための地域の博物館建設

ある意味においては、平和のための博物館はすべてグローバルです。例えば、広島平和記念資料館と長崎原爆資料館を見てみましょう。これらの博物館は、1945年8月6日と9日に日本の2つの都市に投下された原爆に焦点を当てています。しかし、それらはまた、核問題をグローバル化し、国内外の原爆反対運動を強化するものでもあります。同様に、サルバドル・アジェンデ連

帯博物館 Museo de la Solidaridad Salvador Allende (MSSA、Museum of Solidarity Salvador Allende、1991年～現在)は、以前は連帯博物館（1971～73年）、国際レジスタンス博物館（1975～90年）として知られており、アウグスト・ピノチェト将軍の長期にわたる圧政に対するチリの人々の英雄的な闘争を記録・保存し、展示しています。そしてこの博物館はまた、冷酷な独裁者や国家の専制政治との闘いは、どこでも可能であるという強いメッセージを世界に発信しています。また、ルワンダのキガリ・ジェノサイド記念館 Kigali Genocide Memorial（1994年のジェノサイド犠牲者を追悼）、フリータウンのシエラレオネ平和博物館（10年に及ぶ内戦の犠牲者を追悼）、南アフリカの反アパルトヘイト博物館（人種差別の犠牲者を追悼）などもあります。ヨーロッパや米国などのホロコースト博物館（ヒトラーによるユダヤ人への虐殺の犠牲者を追悼）や反戦博物館（戦争犠牲者や戦争抵抗者を追悼）は、あらゆる場所で、平和と人間の安全保障の尊さについて意識を高めています。

しかし多くの場合、各国にある平和博物館は、基本的には国家の悲劇的な出来事を記念し、敵（通常は外国）を特定して悪魔化しています。一般的にこれらの博物館は、自国の国家が自国民への暴力や外国で行った暴力を強調することはありません。そのような博物館は、歴史的な傷を癒すことはありません。こうした博物館は、民族的な排外主義を煽り続け、暴力的な記憶を永続させ、地域統合と平和の可能性を損なうものです。特定の問題をテーマにした博物館はいくつか存在していますが、これらは大まかには平和のための地域博物館や国際博物館と呼ばれているものです。ざっと挙げると、ヨーロッパでは戦争に反対する博物館、ア

フリカでは人種差別に反対する博物館、ラテンアメリカでは国家の暴虐に反対する博物館などがあるでしょう。しかし、それらは主に特定の問題に焦点を当てたものであり、地域に焦点を当てたものではありません。ですから、地域の過去の平和を展示し、地域に共通する悲しみや夢を強調し、地域のアイデンティティーの独自性や色を展示する地域博物館が必要とされています。世界のほとんどの地域には、欧州連合（EU）、アフリカ連合（African Union）、アラブ連盟（Arab League）、ASEAN、SAARC、OASなどの地域組織があります。同様に、多くの地域の経済・安全保障組織や市民社会の組織が今日では機能し活躍しています。では、なぜ平和のための地域博物館はないのでしょうか。歴史は、国民国家が国境を越えた平和の構築に失敗してきたことを物語っています。したがって今こそ、地域が団結して新たな力の基盤として生まれ、地域の平和システムの構築を支援する時なのです。平和のための地域博物館の設立は、そのための一歩となることでしょう。

サイード・シカンダー・メフディ Syed Sikander Mehdi (パキスタン・カラチ
大学前国際関係学部長、元 INMP 理事会
メンバー)



サイード・シカンダー・メフディ教授

人道の港、敦賀ムゼウム

福井県敦賀市にある「人道の港 敦賀ムゼウム」は、2008年に敦賀市が設立したもので、リニューアルのための閉鎖を経て、2020年11月3日に再オープンしました。同市の港は、1920年代にポーランドの孤児たちが、1940年代にはユダヤ難民が上陸した日本で唯一の港でした。

ポーランドの孤児たちは、ロシア革命後の内戦中にシベリアで両親を亡くし、過酷な環境で生活していた子どもたちでした。1920年から1922年の間に、日本赤十字社は763人のポーランド人孤児の世話をしました。地元の人々は彼らを温かく迎え入れ、食料や宿を提供したほか、お菓子やおもちゃ、絵はがきなども提供しました。



敦賀の松原に到着したポーランド孤児たち

1940年から1941年にかけては、リトアニアからのユダヤ難民がウラジオストクを経由して敦賀港に到着しました。彼らは主にナチス・ドイツによる迫害から逃れてきていました。彼らはカウナスの日本の副領事である杉原千畝が発行した「命のビザ」を持っていました。困難な旅を経て敦賀に到着した彼らは、20年前のポーランドの孤児たちと同じように、地元の人々に歓迎され助けられました。敦賀の街は天国のように感じた、とのちに難民たちは述べています。



到着を待つユダヤ難民
(1941年6月6日朝日新聞)

この博物館では、ポーランド孤児とユダヤ難民の歴史や、彼らを助けた地元の人々の証言や物語、そして今も続く心温まる交流の様子をマルチメディアで紹介し、命の尊さや平和の大切さを伝えています。博物館の写真や展示の様子は、[こちら](#)から（日本語のみ）ご覧ください。（杉原千畝と彼に捧げられた博物館については、No. 12（2015年8月号12頁）やNo. 27（2019年6月号2～3頁）でもご紹介しています。）

遺憾なロシア博物館の 大衆向けアピール

平和博物館の反対は何でしょうか？それは、戦争博物館です。そして非常にたくさんの戦争博物館があります。帝国戦争博物館もあります（ここ英国には、そのうちの2つがあります）。しかし、最も極端な形は、おそらく国立戦争大聖堂 National War Cathedralでしょう。最近、少し恐ろしく感じるモスクワのそのような記述（[こちら](#)）を読みました。普段は簡単にはショックを受けない私ですが、今回だけは愛国心と軍国主義、そして正統派キリスト教の神秘主義のようなこの大胆な祝賀会に驚愕しました。右の写真を見てください。確かにナチス・ドイツの敗北へのロシアの英雄的な貢献について主に焦点が当ててありますが、しかし実際

には、チェチェンでの二つの残忍な戦争、ハンガリー・チェコスロバキア・アフガニスタン・クリミアへの侵攻などすべての時代におけるロシア軍の勇敢さに言及しているのです。それほど輝かしいものでしょうか。シリアの独裁者アサドを支援しているロシアのあまり英雄的でない支援を忘れないでください。「そして、将来の紛争が追加される余地がある」と、英国ガーディアン紙のショーン・ウォーカー氏は冷ややかに書いています。

明らかに大衆向け（マスアピール）の博物館です。週末には1日に約2万人が訪れています。モスクワから車で1時間のクビンカ Kubinkaの広大な軍事テーマパーク内にあり、ロシアのクリミア併合とその後の西側との対立を受けて、愛国心と軍事的レトリックが高まっていた2015年にプーチンによって正式にオープンしました。プーチンはこのイベントを機会に、ロシアの核兵器に新たに40基の大陸間ミサイルを追加したことを発表しました。彼は、このテーマパークは「若者たちとの軍国主義的な仕事のシステムの重要な要素になるだろう」と述べています（ガーディアン紙、2015年6月16日）。この愛国的テーマパークは、巨大な多目的射撃場（射撃場）、「祖国に奉仕する原子力」などの展示物、勝利の聖ジョージに敬意を表した寺院、「ゲリラ村」と呼ばれる軍事・歴史的複合施設には馬術センター、軍事・戦術ゲームセンターなどがあります。



平和を支持する人々は、このような軍事の栄光化の規模と野心に愕然するのは当然のことですが、他の帝国主義

国におけるこのような「ショー」と長い歴史も忘れてはいけません。イギリスには、帝国戦争博物館（平和主義に関する限定的な資料をいくつか持っている）だけでなく、ファーンボロー Farnborough 国際航空ショーや、イギリス軍と連邦軍の連隊が行う毎年恒例の儀式（Trooping the Colour ceremony）への女王の参加もあります。フランスでは7月14日のバスティーユ・デーのパレードがパリで行われ、大統領と8,800人の兵士が参加します。米国国防総省によると、「米国国内外には何百もの軍事博物館や戦争博物館があり、わが国の歴史を学び、この国に貢献した人々を讃える機会を提供」しているといえます。おそらく一つの重要な違いは、このロシアの愛国的な展示が、（文字通り）壮大な国の宗教的なイコノグラフィーの中に祀られているという点にあるでしょう。フランスの共和主義、イギリスのポスト植民地時代の多文化主義、そして（弱体化しているとはいえ）人種のるつぼという米国のすべてが、少なくとも今のところ、このようなことを考えられないようにしています。だからこそ、人道的で寛容で非暴力的な代替案で「心をつかむ」ための努力をさらに強めなければならないのです。

詳細（100枚の写真のギャラリーを含む）については、[こちら](#)と[こちら](#)、[こちら](#)もご参照ください。

コリン・アーチャー *Colin Archer*（元国際平和ビューロー事務局長）



ロンドンの良心的兵役拒否者の碑

1976年、私の叔父ジョー・ブレット Joe Brett が他界しました。彼は社会主義者であり、第一次世界大戦中は良心的兵役拒否者（CO）でした。トム・ペイン Tom Paine の言葉は、叔父が信じていたことを表現しています。「世界が私の国であり、すべての人は私の兄弟であり、善を行うことが私の宗教です。」絶対主義者である彼は、その信念のために投獄され、ダートムーア刑務所で過酷な労働を強いられました。私は彼の葬儀にあたり、イギリス世俗協会 National Secular Society の事務局のビル・マキロイ Bill McIlroy にスピーチを依頼していました。彼は、いつか人々が良心的兵役拒否者の勇気と先見性を認め、彼らの記念碑を建てる日が来るだろうと言っていました。



ロンドンの兵役拒否者の碑

（写真提供：ポール・スティール）

1984年、私はインナー・ロンドン特別区教育庁（ILEA）の一員として、ある程度の影響力を持っていました ... ジョーおじさんと良心的兵役拒否者の記念碑を！しかし、当時の首相であったマーガレット・サッチャーが ILEA を廃止したため、私の良心的兵役拒否者のための活動は止まってしまいました。

私はランベス区議会 Lambeth Council に連絡を取り、レベッカ・ジョンソン

Rebecca Johnsonに会いました。私たちは、記念碑設計の公募を行うことを決めました。その碑は、ロンドン中心部のカウンティホールの隣に建てられる予定でした。その後、政府は地方自治体の予算削減を始め、レベッカの役職は真っ先になくなってしまいました。

私は平和誓約同盟Peace Pledge Union (PPU)に連絡を取り、ビル・ヘザリントンBill Hetheringtonとルーシー・ベックLucy Beckに会いました。他の平和団体の代表者との会合の後、ビルがガーディアン紙と交渉し、1993年5月15日の国際良心的兵役拒否者の日に、PPUからの手紙を掲載してもらい、寄付を募ることで合意しました。私たちは支援と資金を得ることができました。



兵役拒否者の石の周りでの追悼イベント

(写真提供：ポール・スティール)

選ばれた場所は、ロンドン中心部のタビストック広場Tavistock Squareにある平和の庭で、碑を建てる構想は、戦いを拒否した人々を象徴する岩を置くことに変更されました。その設計を担当したのは、平和のための建築家Architects for Peaceという団体のヒュー・コートHugh Courtでした。彼は彫刻家のポール・ウェールPaul Wehrleと一緒にカンブリアに行き、そこで彼らは4億年前に生成された火山性の粘板岩の岩を選びました。ポールはその岩に

「殺すことを拒否する権利を確立し、それを維持しているすべての人々へ。彼らの先見性と勇氣は私たちに希望を与えてくれます。To all those who

have established and are maintaining the right to refuse to kill. Their foresight and courage give us hope.」

という言葉に刻んだ石版をはめ込みました。ビルが最初の文章を書き、私の友人の一人であるディック・パースDick Persseが二番目の文を書きました。

ガーディアン紙での訴えからわずか1年後の1994年5月15日に、20世紀を代表するイギリスの作曲家であり、PPUの会長でもあるマイケル・ティペットMichael Tippett 卿が、第二次世界大戦中に良心的兵役拒否者として投獄されていたことから、COの記念碑の除幕式を行ったのです。

私はまた、良心的兵役拒否者のために年に一度の追悼会を開催したいと考えていたので、このような会を開くことに関心をもっていただけそうな100以上の団体に手紙を書きましたが、返事があったのは10以下の団体だけでした……。その団体と翌年1998年に追悼行事を開催することについて合意しました。その当時、英国人道主義協会the British Humanist Associationの事務局長を務めていたロバート・アシュビーRobert Ashbyがこの行事を企画しました。現在では、毎年追悼会を計画するために定期的に会議が開かれています。

ジェス・ホジキンJess Hodgkinは、この団体を「殺人を拒否する権利団体the Right to Refuse to Kill Group」と呼びました（記念碑の碑文から引用されています）。年に一度の式典のために、ビルは様々な国の良心的兵役拒否者の名前のリストを提供します。リッチェンダ・バーバーRichenda Barbour（平和と自由のための女性国際連盟Women's International League for Peace and Freedom, WILPF）は、ビルが彼らの名前を読み上げる中、白いカーネーションを記念碑に捧げます。スー・ギルマレ

一Sue Gilmurray (戦争廃止のための運動Movement for the Abolition of War) は、いくつかの曲を書いて歌い、その中のいくつかは「反対の主張the Raised Voices Choir」という名前の合唱団と一緒に歌っています。

私はまた、英国全土で追悼会が行われるように働きかけてきました。現在では、約8か所で式典が行われていますが、エジンバラでも記念碑を設置しようとしています。このような困難な時代にあっても、過去と現在の良心的兵役拒否者の先見性と勇気は、本当に私たちに希望を与えてくれます。

「殺人を拒否する権利」プログラム／国際戦争抵抗者連盟The Right to Refuse to Kill' Programme / War Resisters International (WRI) については、[こちら](#)をご覧ください。WRIの3年に一度発行される雑誌『壊れたライフルThe Broken Rifle』は、[このリンク](#)から自由にアクセスできます。

エドナ・マシーソンEdna Mathieson, (殺人を拒否する権利団体The Right to Refuse to Kill Group, 英国) 寄稿

イタリアの平和の道 世界一長いアート作品

9月5日、イタリアの芸術家ルカ・フルッツェッティ (デール) Luca Fruzzetti (Dale)が描いた、平和に捧げられた長さ5キロのキャンバスが、トスカーナの町フォルテ・デイ・マルミ Forte dei MarmiからマッサMassaまで展開されました。この海沿いの道と自転車レーンに、何千という蝶の絵が描かれた大きな虹の道へと変わったのです。この『平和の道Walk of Peace』は、サンタンナ・ディ・スタッツェマ Sant' Anna di Stazzemaにある「イタリアの平和のための色協会 Italian

Association Colors for Peace」の支援のもとで開催されました。



「平和の道」制作の芸術家デール氏

2015年に設立されたこの協会は、最初の5年間で100以上のイベントを開催し、5大陸120カ国から18万6,000人の子どもたち(3歳から11歳)の参加があり、世界最大の子どもたちのアートコレクションを有しています。その目的は、豊かな国とそうでない国との文化的・社会的・経済的な距離を縮め、戦争や民族の分裂を起こす論争を否定してくれる普遍的な平和の文化の意識的な担い手となる“明日の大人 the adult of tomorrow”を教育することにあります。平等・正義・連帯・隣人への敬意は、このプロジェクトの基本的な価値観です。



作品とその制作者の様子は、3つの短いビデオで見ることができます(各2分以内)。最初の2本はイタリア語で、3本目は英語です。『平和の道』の制作には、35日間500時間もかかりました。彼は2400リットルの絵の具と60本のローラーとブラシを使い、作品の重さは

1250キロです。 [こちら](#)と[こちら](#)をご覧ください。

「平和のための色協会」は、2000年にイタリア議会の決定を受けて制定されたサンタンナ・ディ・スタツェーマ国立平和公園National Peace Park at Sant' Anna di Stazzemaを支援するために設立されました。第二次世界大戦中、イタリア中部のトスカーナ地方は、ナチス・ドイツによる暴力とテロの影響を最も受けた地域の一つでした。「殉教者」と呼ばれる場所の一つに、1944年8月12日、少なくとも560人の民間人（主に女性、子ども、高齢者）が殺害されたアルプスの辺境の村があります。1948年には納骨堂記念碑が建立され、1991年には抵抗の歴史博物館Historical Museum of Resistanceが開館しました。国立平和公園についての詳細は[こちら](#)と[こちら](#)、また[こちら](#)もご覧ください。



サンタンナ・ディ・スタツェーマの納骨堂

2020年のINMPの執行理事・ 諮問委員の選挙成功： 地域・ジェンダーバランスも期待通り

バーチャル・オンライン会議として開催されたINMP2020の大きな成功を受けて、INMPの役員選挙がかつてない熱気の中で実施されました。INMPの歴史上はじめて電子投票が導入されましたが、定員10名の執行理事に対して17名、定員12人の諮問委員に15名の立候補が

受理され、日本の郵便によると投票を含めて70%以上の投票率でした。

INMPの次の発展段階に向けて、新執行体制が機能することを期待しましょう。

INMPの選挙管理委員会は、京都のINMP事務所と連携して、来期（2021年1月1日～2023年12月31日）の執行理事および諮問委員の選挙を成功裏に実施しました。

選出された10人の執行理事の構成は、男4人、女6人で、地域分布では、ヨーロッパ3人、北アメリカ3人、アジア2人、中東1人、アフリカ1人と良いバランスでした。

また、12人の諮問委員の構成は、男6人、女6人、地域別では、ヨーロッパ3人、北アメリカ3.5人、アジア2.5人、オセアニア2人、アフリカ1人の分布でした。

私は選挙に参加されたすべての有権者と同時に、この選挙を成功裏に実施した選挙管理委員会及びINMP京都事務所に心から感謝します。私はこの選挙によって新しいINMPの基礎がつけられたと確信します。

(安齋育郎ジェネラルコーディネーター)

2021～2023年のINMP新運営体制

〈執行理事〉

JOYCE APSEL (ジョイス・アプセル)



MONA BADAMCHIZADEH (モナ・バダムチザデ)



KIMBERLY BAKER (キンバリー・ベイカー)



CLIVE BARRETT (クライブ・バレット)



AKIHIKO KIMIJIMA (君島東彦)



JESPER MAGNUSSEN (ジェスパー・マグヌッソン)



IRATXE MOMOITIO ASTORKIA (イラツチエ・モモイシオ・アストルキア)



MUNUVE MUTISYA (ムヌヴェ・ムティシヤ)



SATOKO OKA NORIMATSU (乗松・岡・聡子)



LINH TRAN (リン・トラン)



〈諮問委員〉

Christian Bartolf (クリスティアン・バルトルフ)



Lonnie D. Franks (ロニー・フランクス)



Kathleen Cogan (キャスリン・コーガン)



Lucy Colback (Freelance writer, Hong Kong)



Francis Patrick Hutchinson (フランス・パトリック・ハッチンソン)



Shannen Johnson (シャノン・ジョンソン)



Emi Karimata (狩俣英美)



Kevin Kelly (ケヴィン・ケリー)



Mari Chiemi Leilani Kumura (マリ・クムラ)



Lomudak Okech (ロムダク・オケシ)



Eva Rodriguez Riestra (エヴァ・リーストラ)



Erik Somers (エリック・ソーメルズ)



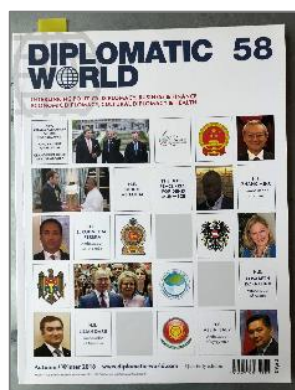
新刊案内

1) 山根和代・安齋育郎編著『世界における平和のための博物館』(前回のニューズレターの記事参照)が、英語版の書

籍としても発売されました。これは、INMP 理事のクライヴ・バレットの尽力によるものです。詳しくは、山根和代・安斎育郎編著『[世界における平和のための博物館](#)』をご覧ください。価格は35.24米ドルまたはそれに相当する金額です。その半額が INMP に寄付されます。日本語版はまだ出版されていません。

2) ピック・ケオバンディス著「平和の文化の一部としての平和博物館」『外交世界』2018 年秋冬号、第 58 号、156-157 頁 Pick Keobandith, 'Peace museum as part of culture of peace', in *Diplomatic World*, No. 58, Autumn/Winter 2018。記事は[こちら](#)から自由に読むことができます。

筆者は、11 月 10～12 日に（オンラインで）開催された「ノグンリ・世界平和フォーラム」で同主題の発表を行いました（フォーラムの報告書と写真は[こちら](#)で見ることができます）。『外交世界』については、[こちら](#)をご覧ください。



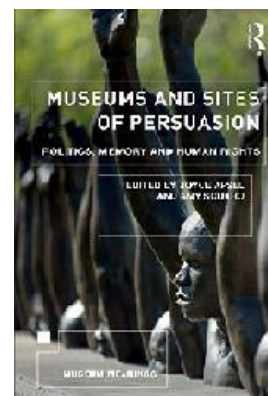
3) ジョイス・アプセル、エイミー・ソダロ編『博物館と説得の場：政治、記憶、人権』（ロンドン、ラウトリッジ社刊 2019 年）Joyce Apsel & Amy Sodaro, eds., *Museums and Sites of Persuasion: Politics, Memory*

[and Human Rights \(London: Routledge, 2019\) 232 頁](#)

本書は、人権・民主主義・平和を促進しようとする場所としての博物館や記念館の概念を検証しています。この本は、そのような場所が説得や論争の強力な空間として機能する可能性を持つことを示すとともに、それらが提示する選択的な記憶や歴史には危険性があることを提起しています。そしてブルンジ、デンマーク、ジョージア、 Kosovo、メキシコ、ペルー、ベトナム、米国など、さまざまな場所にある博物館・記念館・展示物を検証し、それらがどのように困難な歴史を表現し、それと折り合いをつけようとしているかを示しています。

本書の執筆者たちは、これらの公共の目的は、説得の場として、より民主的で平和的な未来を創り出すことを促す道徳的な教訓を訪問者に提供するために過去に関する記憶と教育を使うことであると主張しています。しかし、その事例紹介はまた、政治的・経済的・社会的な現実が、しばしば密かにこの高尚な目標を損なうことを示し、これらの説得のための場所が実際には日常的にどのように機能しているのかという疑問を提起しています。

詳細は[こちら](#)をご覧ください。



4)スルタン・ソムジー博士 Dr. Sultan Somjee の『夢を見る者は預言者と呼ばれる One Who Dreams is Called a Prophet』のオンラインでの出版記念会 (INMP ニュースレター2020年6月、31号 p. 16 参照)

この出版記念会は11月25日に行われました。この行事は、ブリティッシュ・コロンビア大学(カナダ・バンクーバー)公共政策・世界情勢学部のリユー研究所アフリカ・ネットワーク(LINA)によって組織され、著者、校閲者のNgugi wa Thiong'o氏、調停者のKimani Wa Karangu氏も参加しました。LINAはアフリカの学者をつなぐ研究ネットワークです。本の説明や著名なパネリストの経歴など、この行事に関する情報は[こちら](#)と[こちら](#)をご覧ください。



5)マイケル・ノックス著『平和のために働くアメリカ人を称えることでアメリカ合衆国の戦争を終わらせる』Michael Knox, Ending U.S. Wars by Honoring Americans Who Work for Peace

2005年に米国平和記念財団を設立したマイケル・ノックスが新著を出版しました。その中で彼は、「米国の文化は、戦士を崇拝する文化から、平和のために働く米国人を称える文化へと移行しなければならない」と主張しています。「米国の軍事機構は、歴史的に

まれな中断はありましたが、世界中で着実に戦争を行ってきました。その動きを、私たちの平和構築者たちが、しばしば多大な個人的犠牲を払って、後退させてきたのです。彼らは道徳的、政治的な基準を設定し、平和的な代替案のためにたゆまぬ努力をしてきたのです。しかし、彼らはまだ文化的状況の中で正当な評価を受けていません。」ノックスは更に、この出版物で以下のように主張しています。

「平和構築者とその活動を、見過ごされたり、悪く言えば軽蔑されたりしがちな文化の片隅の位置から、主流派へと移行させるための計画を示すことによって、私たちの重要な使命をさらに一歩進めるのです。平和構築者と平和運動が、学校のカリキュラム、公共の場、公式行事、その他の場所で公正に注目される時が来たのです。ワシントンD.C.の中心部に位置する国立公園であるナショナル・モールで、学校で、映画で、マスメディアで、いつの日か私たちの平和構築者が称えられるでしょう。それまで、この本は、これらの英雄に私たちの賛辞を送り続けるでしょう。」

推薦文、抜粋、注文情報などの詳細は[こちら](#)をご覧ください。前号(2020年9月、32号、p.6)の記事も参照してください。

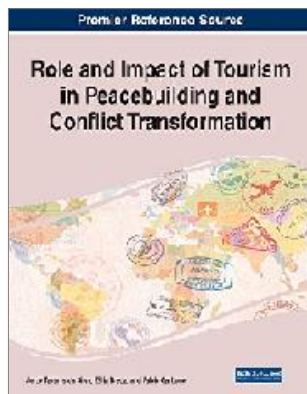


編集後記

6) Jorge Tavares da Silva, Zélia Breda & Fabio Carbone 編『平和構築と紛争転換における観光業の役割と影響』Jorge Tavares da Silva, Zélia Breda & Fabio Carbone, eds., *Role and Impact of Tourism in Peacebuilding and Conflict Transformation* (IGI Global, 2020, IGI グローバル社、2020年、402頁)

この書籍には、平和のための散策道、アフリカの平和公園、「平和：遺産と観光のための指針となる計画」、「平和のための観光の展望」などの読者にとって興味深い章が含まれています。

詳しくは[こちら](#)をご覧ください。



INMP コーディネーターからの お知らせ

INMP の会費と寄付をお願いします。

INMP の財政はみなさまの会費と寄付によって成り立っています。これまですでに会費を支払った方には感謝申し上げます。まだの方は、納入をよろしくをお願いします。

*日本の方は、右の口座に振り込むようお願いします。

この通信は、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、山根和代、安齋育郎、キヤ・キム、小島健太郎によって編集されました。また日本語版の翻訳は、赤松敦子さん、寺田京子さん、山本美穂子さんが担当しました。この通信は、INMP の個人と組織をつなぐ重要な場です。また INMP の会員ではない方が世界の平和博物館の活動を知る上で、大変重要です。

以前発行された通信は [INMP の新ウェブサイト](#) で読むことができます。

<http://tinyurl.com/INMPMuseumsForPeace/>

INMP の通信は年に 4 回発行されますが、定期的に読みたい方は、メールアドレスを次のメールにお知らせ下さい。
inmpoffice@gmail.com

2021 年 3 月に発行される次号に投稿したい方は、2021 年 2 月 15 日までに原稿をお願いします（英文で 500 語以内、日本語の場合 1000 字以内、写真 1-2 枚）。直接英語による原稿を書くことに困難がある場合には、以下の INMP 日本事務局にご相談ください。

inmpoffice@gmail.com

年会費 2,000 円
※送金先：INMP 郵便局振込用口座
記号 14480 番号 49799181
名前 アイエヌエムピー
他金融機関からの振込の場合
店名 四四八（ヨンヨンハチ）店番
448
普通預金 口座番号 4979918